



関西学院大学リポジトリ

Kwansai Gakuin University Repository

## <特集地域協働研究の現場から>特集のことば

著者	木原 弘恵, 中川 千草, 古川 彰
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	133
ページ	9-11
発行年	2020-03-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028545">http://hdl.handle.net/10236/00028545</a>

## 特集 地域協働研究の現場から

### 特集のこぼれ

木原弘恵（関西学院大学社会学部非常勤講師）

中川千草（龍谷大学農学部専任講師）

古川 彰（関西学院大学社会学部教授）

環境社会学研究室（古川彰研究室）には、関西学院大学社会学部の研究室以外にも3つの拠点（サテライト）があり、それぞれに調査研究が行われている。このたび拠点ごとの調査研究をめぐる論考がまとめられた。それらの論考の内容について言及する前に、それぞれの拠点の概要を示すことで、各論考の理解を深める手掛かりとしたい。

まずは、滋賀県高島市マキノ地区知内の「知内研究所」から紹介しよう。ここではおもに村の史料収集とその解析が行われている。1980年代初頭、湖畔集落研究会（のちに環境史研究会、メンバー：鳥越皓之、嘉田由紀子、伊藤康宏、大槻恵美、桜井厚、松田素二、古川彰）が知内で3年間にわたり琵琶湖汚染にかかわる調査を実施した。その後も、古川は約270年以上書き継がれてきた「村の日記」（知内村の「記録」）を翻刻し続けてきた。2005年、関西学院大学大学院社会学研究科が文科省のCOEプログラムに採択されたことをきっかけに、古川研究室は鎌谷かおるを中心とする若手研究者らとともに「村の日記」研究会を立ちあげ、知内をフィールドとした調査を実施してきた。メンバーは知内へ住み込みながらの調査等を実施しつつ、知内の人びとの暮らしぶりや伝承、地域に残された古文書など知内の知的財産を地域の人びととともに学べる研究所として、そこで地元の人びととの協働を続けている。その研究方法については『暮らしと歴史のまなび方－知内「村の日記」からの出発－』（「村の日記」研究会編、関西学院大学社会学部古川研究室、2010年）が詳しい。

つぎに、愛知県豊田市の豊田土地改良区資料室である。遠志保らを中心とした調査チームと豊田土地改良区のスタッフが担った、矢作川から水がひかれる枝下用水の130年史『枝下用水史』（枝下用水130年史編集委員会編、風媒社、2015年）が主要な成果としてあげられる。この本の編纂では、大量の史資料と向き合いながら、現地の人びとを巻きこみ、史料と現場を往復するフィールドワークを実施してきた。この編纂委員会は、現在、豊田土地改良区資料室となって存続されている。この『枝下用水史』を編むプロセスで用いたフィールドワークを取り入れる方法は、古川が芝村龍太（当時、京都大学大学院生）らとともに、2003年に刊行した『環境漁協宣言－矢作川漁協100年史－』（矢作川漁協100年史編集委員会編、風媒社、2003年）から引き継いだものである。この100年史は、漁協メンバーと結成した研究会での議論、漁協メンバーによる聞き取り・フィールドワークによって、愛知県東部を流れる矢作川の内水面漁業協同組合の歴史と川との関わりをまとめたものである。ここで紹介した2冊は矢作川流域史であるとともに、どちらも地元の人びとと調査者が協働でつくりあげたものである。そして現在、『枝下用水史』の続編完成を目指し、資料室スタッフによる地元の人びととの協働が試みられている。

さいごに、ネパール・カトマンズ（パタン）にある映像民俗学オフィス（VFSSO）を紹介する。1990年から、古川はヒマラヤ山麓のシェルパの村で水や森などの自然利用調査に取り組んできたが、2000年代に入りその調査の重点を都市の水利用に移した。そして、日本に留学経験があるネパール人大学院生ら7名とともに、ネパール環境文化研究所（NECRI）を創設し、ネパール人の幸福観についての研究を始めた。また、古川は民俗写真家のアムリット・バジュラチャリヤとともに水利用の調査も実施し、2010年

にはその成果として『Jarunhiti』(Furukawa Akira (ed.), Vajra Publications, 2010)を刊行した。翌年には映像民俗学オフィス(VFSO)を共同で創設し、その頃より、水利用と平行して、急速に姿を消しつつあるバタンの「穴」の調査も始めた。このようにVFSOでは社会の変化とともに消えていく生活のためのマテリアルもしくは生活遺産の記録、研究を行なっている。それと同時に、VFSOは環境社会学研究室のネパールフィールド拠点でもあり、様々な調査者が持ち寄るものが共有される場ともなっている。

先に述べてきたとおり、これまで紹介してきたどの拠点においても、現場の人びとと研究者による地域協働調査が行われている。2019年に入り、それぞれの拠点における研究者と地元の方々との協働調査の軌跡に学ぼうという主旨の研究会を、古川ゼミ主催で実施してきた。第1回(3月23日)は「村の日記」研究会の方々(鎌谷かおる、郡山志保、高橋大樹、柿本雅美)が、第2回(6月23日)は豊田土地改良区資料室の方々(達志保、野原由佳)が、第3回(9月28日)はネパールVFSOスタッフとともに調査を実施してきた方々(葛西映吏子、中川加奈子、中村律子)が、各々の拠点における調査研究について報告してくださった。

以上の研究会では、さまざまな視点で闊達な議論がなされ、それを踏まえたものが、本稿につづく四つの論考である。これらには、地域協働調査のエッセンスのようなものが散りばめられている。

一つ目の「『村の日記』の読み解き方-記録されなかったことを問う-」は、知内村「記録」の史料としての性格について、川の名前、「触書」、印という歴史学に依拠する三つの視点から検討することを目的とするものである。その際、「記録」に記されたこと以上に、その背後にある無数の「記されなかったこと」に注目し、歴史学が得意とする「行間を読む」という研究手法の一つが示されている。この「行間を読む」ということは、第1回研究会において荒木康代(大阪経済法科大学)が、フィールドにおける日常の何気ない会話が史料の限界を補い、史料の行間を読み取る感性を育てることについて指摘したように、フィールドワークにおける重要なスキルであり、現場で養われるものでもある。

ただし、歴史学者は、史料を簡単に「乗り越えてしまうこと」、つまり行間を読み過ぎてしまうことにはことさら厳しい態度で臨むという。ゆえに、複数の異なる学問を専門とする者による知内村での協働調査では、この点が意識され、議論されてきたことがこの論考から窺い知れる。それは、学際的アプローチゆえの批判と内省であり、かつ協働調査ゆえの「うま味」のようなものなのかもしれない。

次の論考「地域を知る・地域で知る・地域とともに知る枝下用水-豊田土地改良区資料室の調査研究と実践-」は、地域史を編むことを目的とした活動のなかで、枝下用水にかわってきた人びとの危機と葛藤の歴史を慮り、住民と共に地域の課題に向き合いながら、第二回研究会で金太宇(関西学院大学)が指摘した「地域住民との信頼関係」が醸成されていく様を描いている。それは、わたしたちに、協働研究の主体について問いかけるものでもある。

2019年春、協働研究を牽引してきた豊田土地改良区資料室に対し突然、閉室通告が届く。研究会の場では、閉室後の研究継続について、いくつかの提案がなされた。しかし、どこか見当違いの様相を呈した。なぜなら、こうした提案の大半は、枝下用水をめぐる調査の主体が、専門的な知識を持つ者と地域住民双方を内包する「資料室」となっていることに気づけていなかったからだ。この論考からは、「専門家」と地域住民とが集い、場と思いを共有し、時間を重ねることによってつくられる、オープンアクセスな研究と協働調査について学ぶことができるだろう。

協働調査では、手にしたモノや、目にしたできごと、語りなどの情報をそれぞれが持ち寄ったり、あるいは同時に経験したりすることで、それらが共有される。「フィールドワークにおける実感の越境性についての一考察-古川彰研究室のネパール『共同調査』を事例として-」では、こうした実証的な事柄の共有に加え、より感覚的なものの共有に焦点が当てられている。それは、調査にかかわる人はすべて、常に変化に富み、わたしたちが得られる情報の大半は時や場に依存することを自覚しているからだろう。しかも、こうした感覚の共有は、第3回研究会で林梅(関西学院大学)が指摘したように、「私(たち)」と「彼/彼女(たち)」、つまり、調査する側とされる側との分断を避けるための工夫の一つにもなり得る。

この点について、「大震災後のコミュニティの変容に関する一考察－ネパール・パタン市 I 地区での共同実践、共同調査から－」は、2015年4月、5月のネパール大震災の経験を通して、さらに具体的に論じている。現地に開設されたデイケアセンターでは、現地の人びとに具体的な運営を委ねながらも、日本から赴く研究者と現地の人びとが慣習や価値観をすり合わせ、高齢者ケアという社会問題を捉えなおしつづけることが試みられている。ここでもまた、目に見えないものの共有が実践されていると言えよう。ネパールにおける二つの論考は、調査にかかわる人びとのあいだに、さまざまなかたちの協働の種が蒔かれてきたことを示すものである。

四つの論考から気付かされたことがある。それは、古川研究室を母体とした協働調査では、意識的にも、無意識的にも「架橋」を実践してきたのかもしれないということだ。文字化されることと文字化されないことを、自制心を働かせつつも文字通り、「行間を読む」ことで架橋する。地域の人びとと共に地域史をつづることで、大文字の歴史からこぼれ落ちてしまうような地域の過去・現在・未来の営みを架橋していく。さまざまな経験と感覚が持ち寄られ、それぞれの立場へとフィードバックされることにより、調査者同士や、調査する側とされる側とが架橋される。

ここにもう一つの「架橋」を加えたい。それは、研究と「それ以外」との架橋である。研究や調査活動は時に、学問的な装置として機能しつつも、そこにかかわる人びとに対し、アカデミックな目的や成果に留まらないような、豊かな関係性をもたらしている。古川研究室の研究活動には、「研究とは個人のなかに閉じているものではなく、対象となる地域社会やかかわる人々に開かれたものである」という暗黙の了解のような指針がある。これは、協働調査というスタイルと相性が良い。ゆえに、この研究・調査のあり方が、次の世代へ、また分野を超えるものとして引きつがれてきたのだろう。